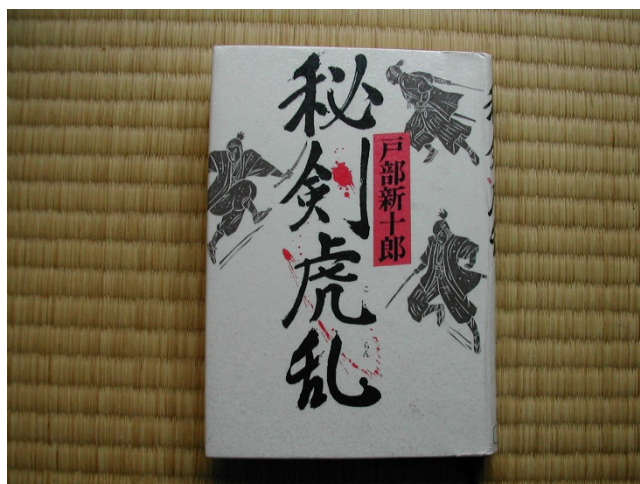


戸部新十郎『秘剣 虎乱』 読後感想

<< 作成日時 : 2008/01/01 16:21 >>



2007年12月29日

徳間書店(2000年11月刊) 著者は確か数年前に他界されている。70歳代だったと思う。時代(歴史・剣豪)作家としては 長命 に属する。

総じて時代小説作家というのは短命で、五味康祐、柴田練三郎、司馬遼太郎、池波正太郎などといった超人気作家は全て60歳代で亡くなっている。他にも五指に余る人気時代小説作家が同じ年代で他界されているはずである。戸部氏は剣術(直新陰流?)で鍛え上げられていたからもう少し生きていただけたらと思っていたのであるが、まことに残念なことである。

こういう具合にみても、今一番危ないのは小生が愛読している津本陽氏ではあるまいか。氏もたしか60歳代に達しており、諸先輩の仲間入りをしないように気を付けていただきたいのである。超人気作家であるゆえの宿命といえば名誉ともいえるが、読者のためにも余り無理をしないで長く生き続けて、更なる名作を世

に送り出して欲しいと願う一念だけである。

芸術家というのは、総じて長命であると思うのだが、小説家(特に時代小説作家)には短命な人が多い。申すまでもなく多作がその原因である。作家自身の責任ではなく、売れる作家に一作でも多く書かせようとする雑誌編集者の、出版社の責任である。短命で世を去った数多くの時代小説作家は、名作の出現ではなく、経済効率主義の追求を第一番とする出版社の犠牲とっていい。

本文とは関係ないことをあえて申し述べるのは、タイトルの本の著者戸部新十郎氏の早すぎる逝去を惜しむからにすぎない。氏は、数ある時代(歴史・剣豪)小説作家の中でも、実際に剣をよく遣う実践者であり、剣術に対する造詣は他の追従を許さないほど深いものがあつた。その集大成ともいえる作品が、『兵法秘伝考』(新人物往来社 1995年刊)である。この本の内容については詳しくは述べないが、一般に知られる古流剣術流派の秘伝といわれる業が、余すところなく解説ないし解明されている。むろん古くから伝わる伝書や剣術書の類を読み漁っている読者にとっては自明の記事は多いにしても、巻末に掲げられた各流派の伝書、目録、流儀解説書などは大いに参考になる。

今回取り上げた『秘剣 虎乱』は、その小説版であるといえるであろう。小説であるから、逸脱や想像力のふくらみがあるにしても、剣の遣い方が極めて具体的また端的に書き込まれており、なるほどと納得させられるのである。しかしながら、実際に真剣を用いてモノを斬る業を日々追及する小生にとって、納得しがたい箇所があるのも事実である。

それは回転業に関する術技である。そした技をまず使うことのない現在の古流派ないし抜刀道の剣士にはまず理解できないものであると断言できる。それは虎切(こせつ)という業で、基本的には脇構えからの切り上げである。いくつかの流派に

その業があるという。それは当然であって、切り上げが業に入っていないのは居合道ぐらいのもので、武蔵が五輪書で書いているように、切り上げは基本業の一つである。

ただし回転して切り上げるとなると、これは秘伝ともいべき業となるのであり、修行が必要である。

作者の戸部氏によれば、回転することによって加速度がつき、斬撃の衝撃は単なる切り上げの比ではないとしている。その通りである。ただ、この部分で述べられている立会いでは、「まったく相似の影を映し合うように」たがいに脇構えから相済み寄り間合いに入ると同時に切り上げるのである。「覚右衛門が見せ太刀から右から斬り上げるのに対し、三之助が一回転して左から斬り上げた」。勝負の結果、三之助は左脇腹をかすめ斬られながらも相手の右脇腹を深々と切り上げ、勝ちを制した。

どこかおかしいと思いませんか？

誰が考えても、入れ違い様に切り上げれば相討ちは必至である。むしろ回転することによって斬撃に遅れが生じるのであり、従って一回転した方が先に斬られる。この小説で勝ったとされる三之助は真っ先に死骸となっていなければならない。この記述を読めば、著者が自ら記述する業を追体験出来ていなかったことを示している。

私は刀道という流派をやっており、特に回転業が得意で、回転切り上げの業を日々稽古しているので、戸部氏の記述の誤りに直ちに気付いたわけである。もしここで回転する際、時計回りに回転する第一歩の左足を相手の正面に向けず、相手の右前方に逃がしその姿勢で回転していれば、相手の右からの切り上げを外すことが出来なおかつ、自身の剣は相手の右脇から胸に掛けて(それこそ)深々と斬り

割っていたはずである。

おそらく、一般の読者は、私が述べている状況をその通りに把握できないであろう。余りにも専門的であるからである。ただし、古流派を真剣で研究しておられる方には解ってくださると思う。剣豪小説を読む醍醐味の一つは、こうしたことを吟味出来る場合があるからである。

初稽古

<< 作成日時 : 2008/01/03 12:24 >>



2008年1月1日

開けましておめでとうございます。

元日の朝6時に起床し、すぐさま作務衣に着替えて稽古に出向く。

いつもは鉄身の居合刀なのであるが、稽古始めであるので真剣を持参する。場所は自分で「塚原道場」と名付けている家の近くの塚原公園。

まだ陽は上り始めたばかりで、東の空がピンク色に染まっている。帯を巻き終え、刀を腰に差した辺りで赤い朝日が梢の間から見えた。拍手を打って一礼し朝日を拝む。いつもは昼過ぎにこの場所で稽古をするので、少し勝手が違うが肌身に沁みる清々しさは何とも心地よい。いつもの稽古に加え、真剣の素振りを300回余り行う。小一時間もすると近くの散歩道を犬を連れて歩く人やジョギングする人達の姿がちらほら見えるようになる。私が稽古している場所は散歩道とは離れた森の中の6畳ほどの孤立した空間なので、通行人に気遣いする必要はないのであるが、真剣の刃の光り方は模造刀とは明らかに違い、そのことを見て取った通

行人が管理事務所に通報する可能性がある。一振りの後素振りを止めることにしたのだが、無我の境地が現実感覚に変わった瞬間身体のバランスを崩し、重なり合う落葉に足を滑らせて刀を持ったまま転倒。刀を持つ右手の小指がとがった石に当たり怪我をしてしまった。

普段の稽古では転倒するなどということはまず無いのであるが、久しぶりに真剣を持つ緊張感が身体のバランスを狂わせたのであろう。信じられない失態というべきであり、果し合いの最中であれば確実に斬られていたところである。

タオルを指に押し当てていたのであるが、なかなか血が止まらず、稽古の後で近くの八幡社に初詣に行こうと思っていたのであるが、血で汚れた不浄の身で神社にお参りするの是不敬であると思い、お参りを止めて帰宅した。

妻にはそのことは告げず、知らん振りをして薬を塗りカットバンを張る。元日早々の負傷は気になるが、死ぬ気で稽古に励めというお告げと受け取り、換わらぬ決意を固める。

2008年1月3日

2日の初夢は残念ながら余りはっきりしていない。いつものとおり確かなストーリーになっていた感覚はあるのだが、憶えているのは、背の高い着物姿に高島田の髷を結った若い女性が(何と太い黒縁の眼鏡を掛けている！)、私たちを案内して宴席に導こうとしている。私はグループの先頭に立って席に入ろうとしている。そのとき私は確か刀を持っていた！その後は憶えていない。宴席での会話やその後に起こる出来事にとっても興味があるが、夢はそこで終わっている様子なのだ。何ともわくわくとする展開ではある。

私は夢を見るのが何よりも好きである。一日が終わって床に就くときどうか血湧き肉踊る素晴らしい夢を見ることが出来ますように、と祈る(神か天か大脳にか？)。普通夢は悪夢であるというが、私の場合悪夢であることは滅多にない。その数少ない悪夢の一二例を述べてみよう。

その一。私はなんかの罪で捕らえられ、他の囚人と一緒に長い行列を作って処刑されるのを待っている。それも何とギロチンによる処刑なのだ。しかもただ普通の順番で殺されるのではなく、初めから数えて偶数番の囚人がギロチンに掛けられる。恐怖の一刻が近づいてくる。一回目は私の前の人がギロチンに掛けられた。目の前で血が噴出する。むもんそこで救われるのではなく、最後の行列に並び、次の順番を待つのである。二回目もクリア。三回目はどうなるか？恐怖に身体は萎縮し、脂汗が顔面を滴り落ちる。順番が近づいてきた。恐怖は極限にまで達する。ついに私の番が当たった！その瞬間眼が覚めた。そのときの安堵感と同種の夢を見た人ではないと理解できないだろう。

その二。私は殺人犯として尾行してきた二人の刑事に追われている。場所はどうかや生まれ故郷のようであり、馴染みのある川の岸辺を走って逃げている。かなり上流で岸の高さは六七メートルはある。最早逃れられないと悟って私は川に向かって身を投げる。自殺しようとしたのだ。身を投げ出した瞬間、あたかも映画のスローモーションのように時間が延び、落ちる際の川岸の石組みがはっきりと見え、石垣の間に生えている雑草の様子などが写真で撮ったように細部まで眼に焼き付けられる。私はゆっくりと超スローで落ちて行く。そこまで音はない。数秒後、川底に身体が叩きつけられたとき、初めてバッシャーンという音を聴く。川底の石に頭が叩きつけられ割れた頭から流れる血が川面を流れてゆくのを川底に沈んだ私は見ている。そうして水面を通して、岸辺で二人の刑事が私のほうを指差して慌てふためき何かを叫んでいる姿を見る。私はああこれで死んでゆくのだなと思い、意識を失う。そこで眼が覚めた。

まるで小説か映画の一シーンのようであるが、その一部始終を鮮明に憶えているのである。眼を覚ましてとき私はしばらく茫然としていた。実際にあったことを追体験しているような気がして仕方がなかったのである。前世での出来事ならともかく、私が生きている以上実際にあったことではありえないが、落ちるときにスローモーションとなって石垣の様子を見ていた体験は、実際もまたそうなのだと強く思うものがあつた。あえて超常感覚とでも呼びたい不思議な体験である。

こうした悪夢とは少し筋が異なるが、やはり超常体験を実感する夢を見た。ベッドで寝ている私の脇は窓になっており(実際もそうであつた)、窓が少し開いていて私のタマシイがそこからすると抜け出て行き、深夜の空間にさ迷い出る。空中浮遊なのであるが、身体は横になってはいず立ったままである。しかも電線の高さ以上には上がらず、キントン雲に乗った孫悟空のようにふわりふわりと運ばれてゆく。

そう運ばれてゆくのだ。というのは自分の両足を下から何者かが支えて持ち運んでるという感じなのである。道路や路地などの地上の景色が夜目ながらおぼろげに見える。私が足を支えられて運ばれているという意識を持ったときふと下を見ると、両足は、人型をした白い雲のような物体に支えられているのが分かった。スッとそれは地上に降り立つとふわふわと曖昧な形になってしまう。次のシーンは出て行ったタマシイが同じ窓から帰ってきて、私の身体の仲にするりと入ってゆく場面である。そのとき眼が覚めた。

夜中であつたが、私のタマシイは間違いなく離脱して夜の散歩に出掛けて行つたのだ、という強い現実感覚を持った。絶対にそのことは起こつたのだ、という直前の体験のみに感じる現実的記憶である。私は興奮のあまりしばらく寝付けなかったが、そのうち眠りについた。しかしながら、朝起きたときにも体験は記憶が薄れることなく鮮明に思い起こすことが出来るのである。単なる夢であつたとはとても思われない。20年も前に体験したことであるが、その記憶は今でも鮮明である。

こうしたネガティブな夢ばかりではない。人間にとってもっと幸福感を味わうことができるセックスの夢である。

世の男性諸君を思いつきり羨ませてやりたい。様々なセックス夢がある中で、そのベストスリーは、マリリン・モンロー、クラウディア・カルディナーレ、そして、日本の松田聖子である。その三人と(時期は異なるが)私は濃密なセックスをした。触感、体感、相手の喜悦を伴ったうめき声、すべてが現実そのものであり、射精した瞬間、「モンローとやったのだ！」という喜悦に覚醒してもしばらくその幸福感に浸っていた。その余りの生々しさは夢ではあるとはいえ、絶対にあのモンローとセックスしたのだという達成感を今でも持ち続けている。

後の二人のうち、カルディナーレは30～40年ほど前にイタリア映画で活躍したセクシーな美人女優であるが、とくにファンであったわけではない。実に不思議なことであるが、ドイツの実存主義哲学者マルチン・ハイデガーがローマの地下にある洞窟に私を案内してくれ、カルディナーレを引き合わせてくれた。そうして私たちは傍らのベッドで交わったのである。そのときの生々しい現実感は、忘れようにも忘れられない。

聖子も特に気に入っていた女優ではない。しかしなぜか私と抱き合う羽目になった。汗みどろになって絡み合う私たち。聖子も私に至上の達成感を与えてくれた。感謝感謝。

残念なことに、この頃はそうした至上夢を見ていない。だが、夢の不思議さ、多彩さ、驚き、至福感、絶望的気分。現実の世界では味わえないワンダーランドは、今夜も私を夢中にさせてくれることだろう。

江戸博大ホール公演「がらがらぼん4」写真公開

<< 作成日時 : 2008/01/18 22:59 >>





『銀座森ギャラリー』詩朗唱公演第二回

<< 作成日時 : 2008/01/19 13:19 >>

2008年1月19日

森ギャラリーでの佐土原台介詩朗唱ライブの詳細が決まりました。

日時 2/16(土) 18:00～21:00

入場料 3,500円(飲物、軽食付き)

場所 ;『銀座森ギャラリー』

競演者 中村達也(ドラムス&バラフォン)

ゲストに気鋭の若手詩人葛原りょうさんを招きます。

彼は昨年暮れ第一詩集『魂の場所』を出版し、朗読

にも力を入れています。

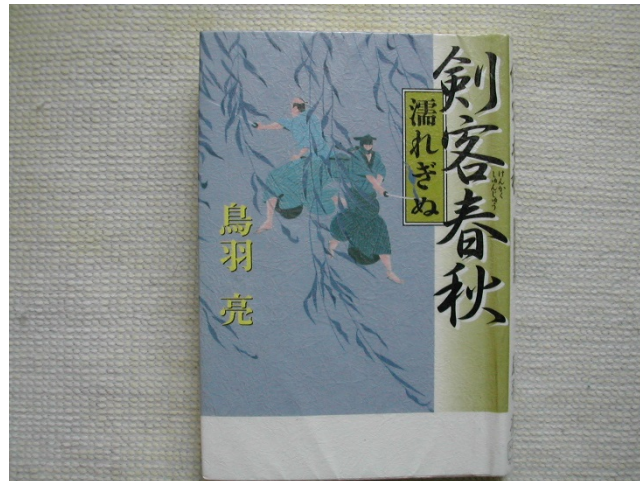
お願い 準備の都合上前日までに必ず予約の電話
をギャラリー宛に入れてください。



上の写真は、一昨年行われた新宿ピットイン公演で
のスナップ(左ー佐土原 右ー中村)

鳥羽亮『剣客春秋 濡れぎぬ』読後感想

<< 作成日時 : 2008/01/19 15:08 >>



2008年1月19日

このところ時代小説作家鳥羽亮の小説を愛読している。この人の小説のほとんどは剣客小説だ。

一部の作家を除いて、時代小説といえばやはり剣に生きる侍が圧倒的に多い。特に自ら剣道、居合、抜刀道などを修練した事のある人の作品は、私などにとって一つの研究材料としても興味深い。なぜなら、剣を修練したことのない作家には書けない業や術技の具体的描写が映されているからである。

その代表的作家のベストスリーは戸部新十郎、津本陽、そして鳥羽亮である。戸部や津本は実在した剣豪、剣客、名人についての著作が多いが、鳥羽は創作した人物を主人公としている場合が多い。特に「秘剣」と名付ける業を数多く発明し、物語の眼目としている。

もちろん、業が劇画や忍者まがいの荒唐無稽なものではなく、古流各派の秘伝や奥伝を基本として、それに作者の想像力を交えて作られているから、説得

力と迫力がある。『剣客春秋』シリーズがすべてそうである。この「濡れぎぬ」でも「鳥刺し」と称する秘剣が登場するが、この業は柳生新陰流や一刀流の小手打ちからヒントをえたものであろう。この秘剣は小手を撃つのではなく、剣を握る右手を突きで刺す(裂く)のである。致命傷にはならないが、剣を取り落とすか左手に持ち替えるかしか出来ないので、結果的には斃されることになる。

私なども公園の森で一人稽古をしていて稽古に倦んだりしたとき、色々と新しい型や業を考えて悦に入っている。即座にそれを自流の型に採り入れたりはないが、一種の遊び心でやるのである。小説では毎回「秘剣」を考え出すのは容易ではないが、作者にとっても密やかな楽しみでもあるのだろう。

薩摩琵琶、鼓、三味線ライブ

<< 作成日時 : 2008/02/02 17:22 >>

2008年2月2日

昨夜西荻窪のライブハウス「音や金時」で、一風変わったライブが行われた。

和の音楽でありながら、普通は一同に会するはずのない演奏者が集って一つの形に創り上げたのである。

リーダー格は薩摩琵琶の塩高和之さん。塩高さんはわが「トーキョー・ポエット・カフェ」でも演奏をやっていただいた経緯があつて、メールで案内を送ってくださったのである。他のメンバーである鼓の今井尋也さん、三味線の早乙女和完さんも店で演奏してもらったことがある。三人に加えてヘブライ語の詩の朗読と白拍子の踊りを披露したゲストの桜井真樹子さんという魅力的な女性の参加があつた。ヘブライ語と白拍子はどう考えたって結び付かないが、(そのことを訊きそびれてしまったが)彼女なりに結び付ける何かがあるのであろう。私だって、詩朗唱と剣術を(別々にではあるが)ライブをやっているわけであり、両者の結び付きに首をひねる人がいるのも事実である。



さて、ライブは、琵琶と鼓、鼓と三味線といった風にパートで演奏が行われ、一部の最後に桜井さんが登場してヘブライ語の朗誦が始まり、三者の演奏が即興のアンサンブルを奏でるといった具合である。

彼女は平安期の白拍子らしい衣装を着て登場し、その姿でヘブライ語の詩（経典？）を朗誦するのである。朗々として自信に満ちた声であるのだが、むろん私たちには何を言っているのか分からない。英語なら断片的に単語を聞き取っておぼろげながらもどういうことを言っているのか分かるのであるが、まったくなんにも分からないのである。それには参ったが、三人の和音へ声が参加したという感じなのであった。惜しむらくは声に奥行きと艶があれば、もう少し違った伝わり方があったと思うが、ご本人の資質に関わることであるので、如何ともしがたい。

塩高さんの琵琶はむろん平家物語の語りが加わる。塩高さんの声は奥行きがありよく通る。これは終了後に訊いたことであるが、声の出し方抑揚等については全くの独学とのことであった。当然師匠から細かい指導があったはず、と素人は考えるのであるが、意外な発言に、小生と小生の同行者二人と共に感嘆の声を発した次第である。

ビブラート奏法を巧みに使った琵琶の多彩で細やかな表現は、ギターやバイオリンなどの洋楽器とは異なる時間の流れと感情表現があり、日本人の感性にぴたりと吸い付くしたしみがある。

鼓の今井さんはいわゆるつつみ奏者という範疇の域を超えており、鼓奏者本来の技法・発声法共にずば抜けている上に、鈴、拍子木（場合によっては、モンゴルのホーミー発声）などを用いて、自らの独自の世界を構築している姿が印象的であった。

三味線の和完さんもまた、独自のスタイルを構築小としている和楽者の一人である。ただし、三味線奏法にはまだ大雑把なところがあり、奏法の徹底した追及がいまいちという印象を持った。声も長唄独特の鍛え上げられたものではなく、日常会話で出す声と同質で気になるところであるが、即興で歌うという姿勢、三味線長唄をより現代感覚に近付けて、若い観客と一体感を持てる演奏を心がけていると思えば、腑に落ちるところがある。



二部の最後にゲストの桜井さんが再登場する。衣装は同じであるが、横笛を吹きながらステージに至り、おもむろに笛を腰に指して、(事前に説明があった)白拍子の舞いをゆったりと舞う。大河ドラマで、義経の思い人であった白拍子の静御前が舞うシーンがあったが、ふとそのシーンを思い出した。もちろん、薩摩琵琶は、平家物語のそのシーンを詠い奏でる。舞う白拍子の表情はあくまでも頑なで、動きといえば、スローモーションのように手をゆっくりと左右に動かし、ときおり身体を前後させるだけで、「舞う」という表現に戸惑うほどである。

見ていて面白いものでは決してないが、私はふとあることに思い当たった。

つまり時間の流れが現代とは違うのだ！

現代はとても慌しくて、西欧から流れ込んできたミュージカル風の踊りやラップなどが動きの早い曲芸的な踊りを普及させ、我々現代日本人はそうしたスピード感に馴らされてしまっている。実は、古来より日本人はもっとゆっくりとして気持ちにゆとりを持った生き方をしてきたのだ、それが白拍子の踊りや琵琶などの演奏にきっちりと(遺伝子となって)組み込まれているのだ、と思い当たったのである。これは一つの発見というべきである。昨夜の演奏会は実に有意義であったと思い、その感動を多くの人に伝えたいと思ったわけです。

「銀座森ギャラリー」詩朗唱公演詳細

<< 作成日時 : 2008/02/23 23:28 >>

2008年2月16日

昨年と同ギャラリーでの公演は、荒れ狂う台風の渦中であって主催者・お客ともに大変な難儀を強いられたが、お客の数が激減することなくむしろ盛り上がった感じで公演を全うすることが出来たのは、不幸中の幸いと言うべきである。

第二回目のこの日は打って変わった晴天であり、屋内とはいえ素晴らしい気象状況での公演日よりとなった。ところが、である。公演一週間前にあれだけ気を付けていた風邪をひいてしまい、急遽クリニックに駆け付けて薬を貰い毎食後歯車のように正確に薬を飲み続けたにも拘らず、鼻声が残ってしまった。外的条件としての嵐などよりもっと深刻な事態である。声が唯一無二の頼りである詩朗唱家にとって、風邪声であるというのは、弦の緩んだギタリストやボーイオリストのようなものである。

とはいえ、多少声の状況が悪くてもポエジーの内容に助けを求めることが出来る。それに私は望みを掛けた。音で手助けをしてくれるのは、ジャズドラマーの中村達也さん。彼はこの日ドラムセットではなく、バラフォーンセットを用意していた。バラフォーンというのは、アフリカ・セネガル原産の鍵盤楽器で、シロフォーンやビブラフォンの原型と言われている。カリンなどの硬い木片で作られた鍵盤の下に大小10数個のひょうたんが取り付けられていて、それが共鳴器の役割を果たす。大きなひょうたんには一個ずつ穴が開いていて、そこに蜘蛛の巣が貼り付けられている。そのひょうたんの上の鍵盤を叩くと濁りを伴った重音が生まれ、音階に変化を付ける。



この楽器の演奏家は少ないが、ケニヤのカクラバ・ロビ氏が世界的に有名である。20年ほど前私はその演奏を東京で聴いたことがあるが、もっぱら旋律中心の打楽器として演奏されていた。しかし中村さんは(通称タッチャン)は、メロディを伴った楽曲を自在に演奏する国内で唯一無二のバラフォン奏者として君臨し、その実力はおそらく世界一と言ってよいと思う。むろんカクラバ・ロビを超えている。

そうした達人とともに朗唱が出来る幸運を私はこの十数年来享受してきたのである。私が一語発するだけでその後の展開を全て把握した音が発せられる。私はその音に乗って緩急を付けた言葉を発するだけで良いのだ。第一部と第二部に分かれ、一部は、タッチャンのソロ、そしてゲストに招いた若手の詩人葛原りょう君の自作詩朗読、そして私の詩集『メガロポイリス狂想』集中同名の詩作品の朗唱。もう一人、私の若い友人である畠中祐美さんの舞が加わった。中々多彩な組み合わせというべきである。



りょう君がその日手にした詩集は『魂の場所』という題名の最新刊詩集で、詩壇の芥川賞といわれるH氏賞の本年度の候補に上がっているらしい。まだ20代前半の若者である。ぜひとも受賞してもらいたいものだ。定刻より15分過ぎて第一部の開始。タッチャンのバラフォン演奏はいつ聴いても素晴らしい。

ドラミングで鍛え上げた腕が、マジシャンのように多彩かつ華麗に動いて楽器の周囲に音の奇跡を構築する。その奇跡は跳ね、拡散し、舞い上がって聴衆の脳髓を痺れさせる。そうして痩せて一見ひ弱に見えるりょう君の以外に力強かつ繊細な詩朗読。その詩に付けるタッチャンの音が、私の場合とる、柔らかかくて、簡潔な音であり、詠み人の感性にまさにぴったりであった。絶妙な取り合わせといえる。その妙なる組み合わせを聴いていて、私は明らかに嫉妬していた。



そうして一部の最後が私の「メガロポリス狂想」朗唱。この作品は読み終えるのにゆうに10分ほどもかかり、大変な長編詩であるのだが、読み急ぎしないよう心掛けて、十分に間をとって読み切った。タッチャンが音の付け方に苦労しているのが伝わってきて、若干焦りを感じましたが、そこは経験でカバーして十分間を乗り切る。鼻声ではあったが声は十分に出すことが出来た、と思う。



朗唱の最中、祐美さんが横で海中で泳ぐ軟体動物のように静かに舞っていた。三十分間が経過し一部終了、幕間の飲物が出る。

第二部は本来の即興朗唱である。前回と同じように客から題を貰う。まさに真剣勝負の場である。色々な声が客席から飛び交う。銀河、水、光、春、花、海等等。数十秒後、私はそれらの言葉を直径20センチの頭蓋のなかに封じ込めることに決定。即興を開始する。頭蓋の中には脳髄があるのではなく光に満ちた波動があるだけ、その波動が外界と反応する。



イメージと言葉の機関銃弾。思いつく言葉やイメージは検閲を経ることなく矢継ぎ早に繰り出される。その最中に、これまでほとんど体験したことのない言い淀みに遭遇。イメージの堂々巡りに一瞬呆然となったが、かろうじて後が続けることが出来た。冷汗ものであったが何とか乗り切ることが出来た。

即興というのは、いつも自分の限界との戦いである。またそれは真剣勝負の場でもあるのだ。負けるわけにはいかない。負ければ死あるのみ。そのことを深く身に刻んで私は即興朗唱を行う。

剣術の修練は、人前での即興朗唱を勝利するための過程に過ぎない。剣術と詩との深い関連性はそこにある。私の感情からすれば、この日の即興朗唱は相討ちであった。間一髪の差で死なないで済んだのは儲けものであったというべきであろう。そのことを思うと身が引き締まる心地がする。危うい場を設定しての剣術の修練に益々励まなければならない。



詩とは、詩人とは一体何だろう？

<< 作成日時 : 2008/03/02 03:24 >>

2008年3月1日(土)

光城健悦様

詩誌『パンと薔薇』127号お送りいただきありがとうございました。

久しぶりに貴誌を拝見した心地がし、全ての文章にゆっくりと眼を通していただきました。何だか懐かしくもあり、また、遠くの景色を眺める心地がしました。

と申しますのも、詩や文章についての感想がああだこうだということではなく、小生はこのところ「詩」から遠のいているからなのです。

詩らしきものを盛んに書き、詩集も数冊出した時期がありますが、自分は詩にも詩人にも遠い存在であるという意識が常にあって、他人に紹介されるときに「詩人のサドハラさんです」と言われると、ドギマギして、「いえ、詩らしきものを書いているだけで詩人ではありません」といった言い訳を付け加えるのが常でした。

猛烈にペンが進み一晩に二編も三篇も書いたようなときには、「もしかしたら俺はシジンなのかもしれない」などと思ったことはありますが、人前に立つと、そうした自覚は微塵となって吹き飛んでしまうのです。

自らに対するこの疑問というか不信感は、結局のところ、詩とはまったく無関係な剣術という世界に自らを導くことになったわけです。剣術の稽古をしていると、いっさいの現実的問題を忘れ果て忘我の境地に浮遊することができるので

すが、書き物をしているときは現実のあらゆる問題を引きずることになり、苦しんだり悩んだりすることになります。懸案の作品を仕上げた暁には、心奥からこみ上げてくる喜び(あるいは忘我)を体験することもあるわけですが、体力の限界まで肉体を酷使する剣術の稽古がもたらす達成感には及ばない気がするのです。

頭を使う作業と肉体を酷使する運動を同列に論ずることはおかしい、と思われるかもしれません。しかしながら私の感覚からすると、この二つの作業は同列に論じてしかるべきものなのです。無心に刀を振っているときはまさに忘我の状態ですが、刀を鞘に納め稽古を終えた後は脳髓が芯から冴えわたり、あらゆる感覚が鋭敏になっていることを実感します。このクレバーな感覚は、書き物を仕上げた爽快感をはるかに上回ります。

何故そういうふうに感じるのか分からないのですが、もしかしたら小生のみの特異な体質によるものかもしれません。

とはいえ、ポエジーと縁が切れたわけではなく、詩即興朗唱ということを今でもやっていて、詩らしきものとの縁をむしろ深めているといってもよいかもしれません。

詩集や原稿を手にして朗唱する場合には詩との縁は近いわけですが、即興ということになるとおそらく詩から離れてしまいます。ただし「詩即興」というからには、言葉が全体としてポエジーでなければならず、発せられる言葉が演説、物語、単なる音声などであってはならないわけです。

書く詩と音声で発せられるポエジー(あえて詩とは言いません)とは質的に異なっており、おそらく別のジャンルといってよいと思います。ある作者が自分の書いた詩を朗読するとき、それは書かれた作品とは別のものとなっており、聴き

手の心に届く受け止め方は書かれた詩とは当然異なるものでなければなりません。肉声によって発せられれば作品は変容するのです。だから、決して朗読をしない詩人もいます。

そうした観点に立つことによって、私は書かれた詩（本来詩とはそういうものですが）から離れてしまっており、ましてや詩人という存在でもなく、即興でポエジーを発する言葉の楽器と化している次第です。

その場で客からいくつか言葉を貰いそれをテーマとして、即座に全体を組み立て言葉を発することもあります。それゆえ、同じ言葉を多用したり、ときに逡巡したり、危うく物語りに転落しそうになったりしますが、最後に発する言葉によってかろうじてポエジーたりえているという、綱渡りのような言葉の曲芸を演じているわけなのです。

剣術の方では真剣を用いた実戦刀法ですが、昔のように他人と斬り合いをするわけではないので、心身の鍛錬と言う意味合いが強いのですが、入場料をいただいた聴衆の前で声を発するからには、発する言葉のイメージが鮮明に客の心に映じることが出来なければなりません。真剣勝負の場と断じる所以です。剣術の稽古は、聴衆の前での詩即興朗唱という「真剣勝負」に勝つためのいわば鍛錬として私は位置付けております。

先日、銀座のギャラリーでピアノの人とジョイント公演をりましたが、二時間の持ち時間をすべて即興というわけにはいかず、新作を書こうとしましたが詩が書けない自分を発見しました。喉のポエジーなら一言題を出してもらおうと即座に声を発することが出来るのですが、テーマがあっても詩が書けないのです。数日かかってやっと一遍をものにしましたが、まるで他人が書いた作品としか思われなようなシロモノでした。

私は、詩(ポエジー)と濃密に関わっていながら「詩人」とは程遠い存在、未だこの世には存在しなかったジャンルの住人となっており、孤独で危険な存在と化しております。たまに思い出したように送られてくる詩集や詩誌をパラパラとめくることはあっても、好んで詩書を手にすることは全くありません。

そのようなわけで、貴誌を手にしたときの冒頭の感想「懐かしくもあり、また、遠くの景色を眺める心地」を述べることになった次第です。これが私の偽らざる現在です。

北海道にはもう十年以上行っておりませんが、剣を抱いてぶらりとわたり、皆さんの前で業の一つでも披露できたら楽しいな、などと妄想しております。お元気で！

佐土原台介拝

最上典世著『喪服の町』読後感想

<< 作成日時 : 2008/03/09 01:08 >>



2008年3月8日

モガミテンセイの新しい長編小説が出た(2008年2月文芸社刊)。

原稿用紙2000枚を超える野心作『瀝青緯度』を出してまだ三年弱しか経っていない。今回も1000枚を優に越える大作である。

十分な物語性を持っていながら、通常の小説のいわゆる物語というものはない。奇妙な言い方かもしれないが、普通の小説のように読者の意識をk 軽快にリズムカルに次へ次へと運んでくれないのである。

つまり590ページの小説の全体がほとんど会話形式で成り立っており、それも一人一人の会話が異常に長い。人間の心理の綾を微に入り細をうがって書き立てるので、その心理の動きを追ってゆくのに疲れてしまうのである。

難解な哲学書を読み進むようにすぐに意識が痺れ眠くなってしまうのである。つい眼をつぶってしまうとうとうと夢を見る。はっとして頁に戻るのだが、夢の内容と本の内容が交じり合って実に夢幻的な虚構空間が現出する。夢と小説の物語が

ごっちゃになってしまう。かといって、決して難解な文章で綴られているわけではなく、誰にでも分かる平易な会話が 無限に 続く。

内容は、金曜日から月曜日までの四日間を扱っていつに過ぎないのであるが、読む方にとっては無限に続くと思われてくるわけだが、とりあえず簡単に物語の進行をまとめておこう。

ある北国の町に住む若い男の家に、父親と名乗る脚の不自由な老人が転がり込んでくる。彼は離婚した母親と暮らしていたが、数年前に母親を亡くし一人暮らしである。亡くなった母親は生前父親のことについてはほとんどしゃべらず、彼カラスは父がどんな人か確実な情報を持っていない。従って父親と名乗るその老人が、(相手がそう言うだけで)自分では確信を持ってないのである。顔も似ていない。

しかし老人は母親のことについてはよく知っているふうであり、父親と名乗るからには面倒見ないわけにはいかない。とはいえ、長く一緒に住む気はなく、しばらくして西初刈という村の保養センターに父親を預けることを決意する。かつて母親と一緒に住んでいた一軒家を売り払い、その費用に当てまでして。

男は村の隣の町に部屋を借り、町の高校の英語講師として雇われる(その学校でカラスという徒名をつけられる)。カラスは講師という立場に不安を感じ、どうにかして正式な教員として採用して貰いたくて、高校の理事となっている町の有力者につてを求めようとする。ここから少しずつ何かが変わってくるのだ。

折りしも町では野球大会がシーズンを迎えており、カラスは役場から審判を頼まれる。その仕事を名誉あることと思う彼は、町の人達に知ってもらおうという思惑もあって、どこに行くのにも支給された審判員帽をかぶっている。

あたかもその夜町長の母親が死亡し、通夜が営まれることになり、翌日も頼まれ

た審判員を務める際に喪章を腕に付ける。通夜に顔を出すことによって自分も町の一員であり、顔を売ることによって町の有力者に良い印象を与え、あわよくば、正式な教員として採用してもらおうコネを作りたいと考えている。

そうして、村や町の人達と知り合っゆく内に、自分の行動が逐一人々に知られていることに気付くのである。彼は自分を売り込む工作を色々しようとするが、町長にも、ホテルのオーナーにも、校長にもことごとく拒絶される。その町で生活することがあたかも罪であるかのように。

彼の行動のすべてが全て筒抜けなのである。町のクラブの女の子と一夜を共にしたことまで町の全ての人に知られてしまっているふうなのである。(こうした描写は、カフカの『城』や『審判』の世界に通じるが、これは小生の私見であって、文体も内容も全く異なる作者のオリジナルであることは申すまでもない。一見、村落共同体の狭い社会を描き切っているように見えるが、実は、携帯電話やパソコのインターネットを通して、個人の情報が筒抜けになっている現代社会の暗喩でもあるのだと私は思う。)さて、

町で接触を持った人達との膨大な量の会話が続いてゆく。人間心理の深い洞察力を随所に披瀝し物語の展開の上手さに思わずうなってしまうのであるが、だからといって、寝るのも忘れて夢中になって読み進んでしまうという訳にはいかない。疲れ果て、すぐに居眠りをしてしまうという読書状況に変わりはないのである。難しい本を読み慣れた人でも、この小説を読み通すのには 相当の 忍耐を要するはずである。

というのも、話をしている人が、飲み屋のおね一ちゃんであれ、新聞記者であれ、バーテンダーであれ、インターフォンの会話相手であれ、また校長であれ、文体の

調子がほぼ同じであり、作者その人が延々と自説をからめた肉声を披瀝しているようなものだからである。（こうした書き方は、小説の手法でもあるものとして十分意図的に用いているはずであり、たまたまそうなったというものではない。）

全編を読み通す苦痛は、主人公の意識の流れを延々と綴るジェームス・ジョイスの『ユリシーズ』を通読するときには味わったものと同種である。むろん、時には時間を忘れて読み耽る場面もなくはないが、大旨、眠気と、苦痛と、精神の闘いの連続なのである。

ただし、私が大いに感心したことが一つある。それは、作者が手抜きを一つもしていないことだ。話し手の心理であれ状況であれ、プロの棋士が将棋の駒を動かすごとく、先へ先へと心理を読み込んで実に丁寧に書き込んでいるのである。作者の描写への執念と非凡な筆力を示して余りがある。

小説の主人公であるカラスは、正規の教員になるという夢を捨て、ついには果敢な現実へと突き進んでゆくことになるが（その内容を記すことは出来ない。結末は、全編を読み通すことが出来た忍耐力のある読者だけが享受しうるものだからである）、その行き着く先は読者の想像力に委ねられる。

読み終えた後の感じは、やっと終わったという開放感と共に、作者の途方もないエネルギーの塊りをどさりと投げ与えられた心地で、しばし打ち沈んでしまった次第である。

作者は、何かの思想やイデオロギーを伝えようとしているようには思われない。むしろ、何かを伝えることを全力で阻もうとしているかにさえみえる。

作者は、真実などどこにもなく、事実と思われることさえ立場が違えば存在しなく

なり、また、確かなものなどは何一つとしてなく、世の中の全ては曖昧かつ茫洋としており、これだと言いきれるものはありません、と考えているように見える。

そうして、ただ一つ確かなことは、そのことを述べようとしている自分の文章そのものなのだ、とつぶやく彼の薄いくちびるが眼に見えるようだ。

刀道連盟春季昇段審査

<< 作成日時 : 2008/03/16 00:04 >>

2008年3月9日

全日本刀道連盟の春季昇段審査が行われた。

昨年までは日野市の本部道場(東京至誠館道場)で行われていたのであるが、今回から朝霞市の武劇館道場で行われることになった。

武劇館は連盟の最高(主席)師範である林邦史朗先生が経営されるアクションクラブ「若駒」の本部道場でもある。この日の審査対象者は、初段3名、二段一名、三段3名、五段2名計9名である。本来は林先生の他に連盟の師範会から、副主席師範、理事長が審査に加わるようになっていたが、副主席師範は仕事で海外に出張されており、理事長は病気で入院中という事態になったので、林先生と小生(佐土原)の二名で審査を行うことになった次第。

午後一時より審査開始。いつもながら道場全体にビリビリとした緊張感が漂う。審査の対象となるのは、術技だけではなく、服装、礼法、刀の持ち方や差し方なども勘案される。

初段は木刀による10本組太刀、初二段の型、巻き藁を一本立てての袈裟斬りによる試斬を試される。藁を袈裟で斬るのは素人でも出来るので、斬ったその位置で刀を止めることが要求される。そのためには藁を斬るときに力の微妙な配分が必要なので、配分の仕方を誤ってしまうと、藁の途中で刃が止まってしまったり、試斬台を倒してしまったりする。

一度斬れなかったからといって落とすことはしない。何度か斬らせてその技量を見るのである。稽古ではいつも斬れている人でも、審査という場になると斬れない

人もいる。何度か斬らせている内に勘を取り戻す人もいれば最後まで自分を見失ったままの人もいる。その辺りが、合格不合格の境目となる。

段位が上がるにつれて、むろん業も高度なものとなり、試斬の巻き藁も三本四本と増えていき、切り上げ、水平斬り、片手抜打ちの業などが試される。

五段・錬士ともなれば、それまでにクリアしなければならない全ての業に加えて、指導者としての見識、理念なども口頭で訊かれる。わけの分からないことを口走ったり、はっきりものが言えない人は、たとえ業が優れていても不合格となる場合がある。

全体に良く稽古しておりまあまあの出来栄であったように思う。ただし二名が不合格となった。秋にも審査があるので落ちた人たちは心機一転して頑張ってもらいたいものである。

終了後、道場の中央に全員で車座になり、酒やラーメンをご馳走になった。その後、全員先生の居室に呼ばれ、試斬用に買い集めていた10振りほどの刀を拝見した。先生の好みで造らせた刀も数振りあるとのことであった。その内の一本を三段に合格した門下生が買うことになり、皆で祝福する。

帰りは受験生たちと朝霞の駅前の飲み屋で一杯やる。落ちた人もいるわけであるからおおっぴらに祝杯を挙げるわけにはいかなかったのであるが、「お疲れさん」で乾杯し、それぞれ次の目標に向けて意欲をたぎらせていた。



あるフラメンコ歌手の死

<< 作成日時 : 2008/04/08 23:14 >>

2008年4月8日

彼とは何時何処で知り合ったのだろうか？

他の友人知人については、ほとんど思い出すことが出来るのであるが、彼についてはどうしても思い出すことが出来ない。ある日ある時ふっと私の人生の一齣に踏み入ってきて、ごく自然に友達付き合いをするようになったという感じなのである。

付き合い始めてまだ10年ほどしか経っていないのであるが、彼とはよくウマが合い、彼が出演する公演に度々出掛けたり、私のカミサンが経営する小石川の小さなパブ(トーキョー・ポエット・カフェ)で、ギターの人たちとミニコンサートを持ってくれたりもした。

そういう縁もあって彼は月に一度ほど店に顔を出すようになり、フラメンコのこと、絵画のこと、また芸術一般について大人の会話を交わしたわけである。

特に彼は霊的感覚に敏感で、私をはっとさせるようなことをよく言った。そうした話の中で最も印象深いのは、二年ほど前に自殺に等しい死に方をした私の親しい友人であったあるオカリナ奏者に関することである。

このオカリナ奏者は亡くなったときにはまだ40歳になっていなかった。オカリナ奏者と私の付き合いのいきさつ、短歌作家としての彼のエピソードなどを店で話をしたことはある。

ところが、ある日、店にやって来た彼はおもむろに、オカリナの彼が今僕の横に座っていますという。むろん私にその姿がみえるわけがない。彼はしばらく横に座っている冥界のオカリナ奏者としてしばらく話しているふうであった。本来ならその光景は異様で妖しいはずであるが、その場に流れている空気はむしろ明るく陽気といってもいいほどで、あの世の人間が店のカウンターに座り、会話を交わしているとは考えもつかない風景なのである。

それが彼の個性そのものなのであった。彼は決して議論を吹っかけてくるようなタイプではなく、談論風発、その時々に応じて巧みに話題を変え、難しそうに成る議論を現実の出来事に置き換えなどして、場を陰悪な空気に変えるようなことがなかった。

ある日、店を訪れた彼を伴って新宿歌舞伎町のある店に案内したことがあった。その店には様々な表現者が訪れることでよく知られており、彼も初対面ながら客と話を楽しんでいるふうであった。私たちは心からその場の雰囲気を楽しんで店を後にしたのである。

後日、私一人でその店に顔を出した時、店のママから意外なことを聞かされた。

ある日彼が一人で店にやって来たらしい。その間の経緯については詳しい説明がなかったが、店に備え付けのギターを弾いていた彼が突然ぶっちぎれ、ギターの弦を全部引き切ってしまったというのである。ちょっとやそつとでは弦は切れないから、彼の指も切れ血を流していたという。

何があったのかは知らないが、店の備品を破壊するというトラブルを起こしたわけである。彼は、むろん飲み代は払ったであろうが、謝りもせず店を出て行ったよう

である。そうしたことは慣れているママはむしろ淡々として話してくれたのであるが、彼を紹介した当事者としては、黙ってママに頭を下げるしかなかった。

その後も彼は小石川の店に顔を出したが（現れるたびに毎回違った美女を同伴していて、心から羨ましく思った）、私は歌舞伎町の店のことについては一度も触れなかった。もし言うとすれば彼の方から話が出るべき問題であった。お互いが問題にしないことはいつかは忘れ去られる。

彼が亡くなったという訃報をくれたのは、彼の親しい友人であり、フラメンコ公演のパートナーでもあったギタリストである。突然動脈瘤が破裂して、血が肺に逆流し呼吸ができなくなり死に至ったらしい。壮絶な最後というべきである。

通夜には出られなかったが、翌日の告別式に出席することが出来た。

フラメンコダンサーと思しき女性がほぼ半数を占める300人を超す参会者が集う中、霊柩車が遺体を運ぶべくバックして停止した場所が丁度私が立つまん前なのであった。

小さなお寺の境内は多数の参会者で埋まり、境内の満開の桜はすでに散り始めていて、開け放たれた霊柩車の車内に、桜の花びらが吸い込まれるように吹き込んでくる。

そうして長く尾を引く警笛の音と共に、無数の桜の花びらを棺に載せて彼は斎場へ運ばれてゆく。彼にふさわしい最後の光景というべきである。

「さようなら、直ちゃん、近い内にあの世で会おうな」。

そう、彼の名は加藤直次郎。わが国のフラメンコの業界にあって、貴重にして得がたい歌い手かつ素敵なパーカッショニストであった。

2010 年 11 月 14 日



先月の下旬、彫刻家磯部廣二が死んだ。69 歳の若さである。

私は彼とは 30 年来の友人でありまた喧嘩仲間でもある。数年前から直腸ガンを患っており、我々が病気のことを知ったときにはすでに全身に転移しており、自宅から病院へ通っていた。

磯部と 40 年以上もの付き合いがある石狩在住の木版画家大島龍は、私とも長い付き合いのある親友であるが、彼にも磯部のガンのことは伝えてあった。

昨年大島が個展のために東京へやってきた折、磯部の見舞いと励ましのために、私と二人で保谷にある磯部の自宅を酒つまみ持参で訪問した。そのときには全身にガンが転移した人間とは思われないほど顔の色艶もよく、むしろ少し太って見えたほどである。

よく酒も飲み談論風発、芸術論にも花が咲き、その勢いで翌年(2010年)三人展をやろうということで急速に話しが纏まったのである。

彫刻と木版画という二人に対して、詩即興朗唱という立場を掲げる私に対して、「絵を描いてみれば」と磯部が言う。私がかつて、インダストリアルデザイナーとして芸大まで目指したことがある、などと言ったことを彼は憶えていて、私に奨めたものと思われる。とはいえ、私は自分の描いた絵を公にしたことは一度もなく、また絵を描くということすら何年もやっていなかったのである。スケベ心をくすぐられる思いで不承不承何らかの形で絵を発表することを表明した。大島も半信半疑の顔付きながら、快く同意してくれたのである。

そうしてすぐさま磯部と大島の二人が度々個展を行っている銀座の「ゆう画廊」の佐藤幸恵ママに相談に行き、画廊の企画展という形で翌年の1月の三人展が決定したのである。



タイトルの『三狼展』というのは磯部の命名による。我々は彼に新作を期待したのであるが(元気そうに見えたので)、その体力は残っていないと磯部は答え、自分が最も気に入っている旧作の展示にさせて欲しいという。これまで係わり合いのあるミュージシャン数名に参加してもらい、『三狼展』は賑々しく開かれた。

磯部は依然として元気で、良く酒を飲み齒に衣を着せぬ発言で来客を煙に巻く。病に苛立っているせいもあるだろうが、初対面の客に対しても遠慮してものを言うということをしてない。自分の感じたこと思ったことをずけずけと述べる。

彼のことを知っている人間は適当にいなす術を知っているが、初めて顔を合わせる客は、何と無礼な奴だ、と心では思いながらも務めて波風が立たない対応をしようとする。そうした対応がかえって気に食わず追い討ちをかけるように罵りの言葉を投げかけるという具合だ。客は、ほうほうの態でその場からゆっくりと離れてゆくしかない。

むろん、彼は単に粗野で人間に対する対応を知らない人間ではない。微妙に相手を選んで言葉を発している。

彼が、俗物俗人とみなした相手に対しては容赦がない。同じ芸術家仲間でもそのような彼に共感を抱く人もいるし嫌う人もいる。したがって、彼が出展している会場では、常に激しい議論や怒声が飛び交っていた。

長い付き合いではあるが私もそうした人たちの一人であった。飲んだ後で議論の応酬が始まり感情が激してくると、

「おれはイソベコウジだ！ おりゃ、おめえらと違うんだ！」

という激しい言葉が彼の口から吐かれる。その言葉には、「おれは、あんたら俗物とは次元が違うんだ」と言ってるとも取れるし「おれは、あんたらが考えているような人間ではないんだ」とも取れる。

いずれにしても相手を見下している言葉としか受け取れない。

それを言われると「自分を何様だと思ってるんだ、偉そうなことを言うな！」と一気に感情が激発し、果ては殴り合いや首の絞め合いとなってしまう。

すぐに自分たちがやっていることの幼稚さ、ばからしさに気付いて手を止めるのであるが、取っ組み合いの後でも彼は絶対に謝ることはない。一切の弁解はしないのである。感情の激発を抑えることのできる人は、「ほら出たぞ出たぞ」とばかり笑っていなし、話題を変える。

私は激する方なので首を絞め合ったり取っ組み合いになってしまうのである。彼は、彫刻で食っているとはとても思えないが、(大学を卒業したばかりのごく一時期を除いて)食うための労働は一切していない。何で食っているのだろうと詮索する者もいるが、我々にそれを明かしたことがない。女に食わしてもらっている様子はまったくなく、かといって、親の遺産で食べているようにもみえない。誰かが、彼は日常用具の発明で特許を得てそれが大当たりし食うことに困らないのだ、と言っていたのを聞いたことがあるが、確証があるわけではない。

食うための労働をしなければ、詩朗唱にしても剣術にしても自分のやりたいことを思い切って出来ない私としては、磯部に、「おれは、おめえらとは違うんだ」と言われても仕方がないところがある。だからこそ腹が立つ。

磯部の人生にはそのような謎めいた部分があった。彼の彫刻作品には、自分の全人生を注ぎ込んで全身全霊で表現する人間特有の魂の輝きがあり潔さ(いさぎよさ)がある。その作品に感動する我々としては、結局は彼が吐くいかなる言葉に対しても寛容となってしまうのである。議論をすると憎たらしいと思えばらく疎遠になっても、どこかの会場などで出会うと、100年の知己のごとく杯を合わせてしまう。

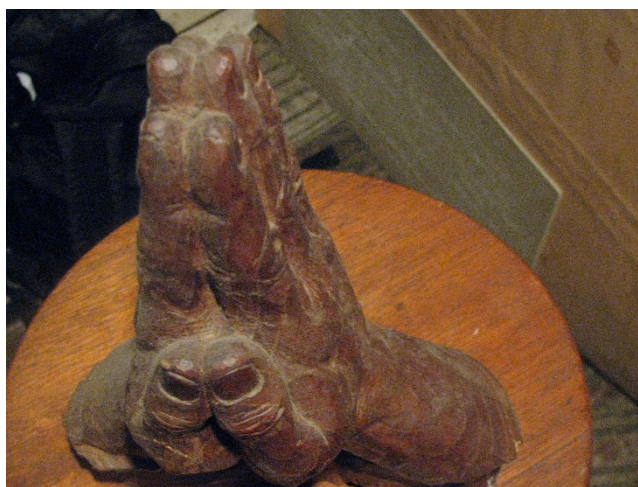
共によく飲み議論を戦わせた『三狼展』から未だ一年も経っていない。

もう彼と罵り合うことが出来ないのだと思うと、懐かしさと寂しさがじわりと滲み出

てくるのを禁じえない。

深く愛した女性の影が見付けられないのは残念であるが、彼は膨大な彫刻作品と詩を残して、自分が思うように自由に生きそして死んだ。彼のような個性を持った芸術家はこれからもそうそう出ることはないであろう。

彼に関するエピソードや話題は山ほどあるが、今は生涯に付き合いのあった知人友人と語らって、静かに「偲ぶ会」の準備にかかりたいと思っている。



剣術漬けの一日

<< 作成日時 : 2008/04/12 01:08 >>

2008年4月12日

この日は店のランチ作りから開放されて小生の休養日。九時過ぎまで春眠をむさぼる。

起きて冷たい麦茶を二杯飲み新聞を読みながら道着等の洗濯。その間昨夜煮ておいたホタテをつまみに「黒霧島」のロックをゆっくりといただく。

洗濯物を干し終わって後麻昼兼用の食事。食事後二時まで小澤正夫著『宮本武蔵一二刀一流の解説』を読む。

この本は図書館から借りてきたものであるが、20年ほど前に吉川弘文館から出版されている。著者は大正三年の生まれだからもしご存命なら94歳になられる。巻末の著者紹介の項に41年間剣道史および武蔵研究を続けてこられたと書いてあるから、武蔵研究の専門家であるといってよい。

記述は詳細を極めており、二刀流の業の解説が詳しく記されているので、私などにとって大変参考になる。また二刀を同時に抜く方法の記述は具体的で分かりやすく、ぜひ試してみたくなった。

武蔵の研究書は無数といってもよいほど出ており、目につけば大抵の本は読んできたが、武蔵の弟子筋に当たる人たちが書いた『二天記』『兵法先師伝記』等が原文で全文掲載されていることがありがたかった。

とくに『兵法一』には、これまでの研究書で紹介されていなかった幾つかのエピソードが書かれているのであり、武蔵の臨終の際の模様を述べた下りは少なくとも私には初めて出会う文であった。そこにはこう書かれている。

「臨終に起つて帯を締め脇差を帯し片膝を立て、刀を左に杖に突いて終わられけるとぞ。」

二時きっかりに作務衣に着替え帯などの入ったナップザックと刀ケースを引っ担ぎ、「塚山道場』に出掛ける。

風もなく暖かい陽が照りつける願ってもない小春日和であり、すでに桜はほぼ散り終わっているが、家々の庭にはもくれんの花が満開で、えも言われぬ芳醇な匂いを放っている。

所定の場所に着き帯を締めて剣術体操をした後木刀の素振り体捌きの稽古、居合刀の大小を差しての型の稽古。むろん、直前に呼んだ本に書かれていた二刀を同時に抜く方法を試してみた。割合にスムーズに出来た。

二刀流の型を若干なぞってみた後、自分で作り上げた型を繰り返しなぞる。散歩にやってきたと思しい年配のオヤジが先ほどからこちらを見ていたのは分かっていたが、興味を感じてみているのであろうと高をくって稽古を続けていると、なにやら声をかけてくる。稽古を中断して対応すると、

「使っているのは真剣ですか？」と言うので、

「とんでもありません。ここは公園だし真剣など使いませんよ」

と答える。オヤジは小鼻をピクピクうごめかせながら口に出した。

「先ほどから光っているからおかしいなァと思って見ていたのだが、たとえ模造刀でもここは都が管理する公園だから、そんなもの振り回すことは駄目なはずですよ。ゴルフの素振りだって禁止されているわけだし」

「それは分かっています。管理事務所には一応断っているのですが」と私。

「私は管理事務所の人間ではないけれど、いくら人の居ないところだといっても危

ないですよね」

何だろう、このオヤジはと思いながら、

「親切に注意していただいてありがとうございます」

と私は言いそこで会話を切ってまた稽古に戻った。

ちらりと見るとオヤジはこちらの様子を伺いながら、管理事務所の建物の方へ歩いて行く。密集する木立に囲まれた金曜日の午後の公園の奥まった場所を通る人もなく閑散としているのに、何故善良な市民面してそんなおせっかいを焼くのだろう、大人しく散歩していりゃあそれでいいじゃないか、と思いながら剣を振っていたら、事務所の人がやってきた。

「いま、通りがかりの人があれは危ないのではないかと、言いに来たので一応やってきたのですが、私は別に人がいる場所でやっているわけではないので良いと思うんですけどね。言いに来た人がいるので形だけでも伝えておかないとね」

「ご迷惑をおかけしました」

といって鞘に刀を納める。

ついにここも駄目になるのかという予感がある。

たしかに、これまで誰にも注意されなかったことが不思議なのだ。もしやるならまだ日が暗い早朝しかない。そう思い決める。

帰宅後、また『宮本武蔵』を読み耽る。餃子ライスの夕食。

8チャンネルで特別番組池波正太郎原作の『剣客商売』を観る。二時間番組。辻斬り役がミスキャスト。期待して観ていたがはぐらかされた感じがした。むしろもう一度原作を読み返そう。何度読んでも原作に裏切られることはない。

詩即興朗唱ピットイン公演

<< 作成日時 : 2008/04/12 15:20 >>



ジャズドラマー中村達也さんの毎年の新宿ピットイン公演

『マイセルフ ポートレイト ON パーカッション SOLO』

にまた客演として出るようになりました。

小生の場合今回はテーマがあり、「年齢」ということになっております。

大枠は考えますが、詩を創って暗誦するのではなく、あくまで即興です。

結果をお楽しみ下さい。

お誘い合わせの上お越しいただければ幸いです。予約を申し込まれた方は、
当日店のチケット売り場において置きますので、その折料金をお支払い下さい。

日時 5月9日(金) 19:30～(03-3354-2024)

出演 中村達也(ドラムス、バラフォーン、スチールドラム他)

渋谷和生(津軽三味線)

佐土原台介(詩即興朗唱)

料金 ¥3,000(ワンドリンク付き)

久しぶりの至誠館道場での稽古

<< 作成日時 : 2008/04/20 21:22 >>

2008 年 4 月 13 日

毎週日曜日の稽古にはどんなことがあっても通っていた日野の刀道連盟本部道場に、久しぶりに稽古に出掛けた。

刀道の稽古は月二回文京スポーツセンターで行っているが、そこでは試斬は出来ないのでフラストレーションが溜まっていたことは事実である。

最高師範の林先生からお誘いがあったからには、何としてでも出席するしかない。

この日は他にもかつて共にこの道場で稽古していた若いメンバーが 10 数人集ってきており、久しぶりで顔を合わせ事もあって、楽しい稽古が出来た。

稽古前に林先生の指導で立禅というものをやり、精神の英気を養う。

五月十一日に例年のごとく日野市主催の新選組祭りが行われる予定であり、刀道連盟も例によって試斬演武を行うことが決まっている。その参加者を募り選定する意味もあったようである。

座り居合を含めて主として真剣による抜打ちの稽古に力が注がれた。

試斬台に立てられた巻藁を横に眺め、入り身で身体を捌いて抜打ちに後ろに回った敵を切り上げ、また水平に切り捨てるのである。これが至難な業であることはやってみればわかる。 左右の入り身裏入り身でこの業を繰り返す行う。

実は、私は公園でのいつもの稽古で自分が考案した業として必ずやっていたので(私の業は後ろを振り向きざま切り上げた直後、さらに身体を一回転させて敵の

刃を交わすと同時に水平で胴を切る)、理想的な角度でワラが両断されるかどうか
が課題だっただけである。

稽古終了後は例によって近くの蕎麦屋「益田屋」に皆で押しかけ、次々に出てくる
素晴らしい料理に舌鼓を打ちながら楽しい酒をいただいた。稽古の醍醐味はこ
れに尽きる。

精神を集中した後のリラックスした酒、これがあるから生きていられる。





浴槽呼吸法

<< 作成日時 : 2008/05/03 23:00 >>

2008 年 5 月 3 日

剣術の達人名人の年齢について調べてゆくうちに、江戸時代まで代々平均寿命 50 歳と言われてきたのにも関わらず、彼らが平均寿命をはるかに超えて長生きしていることを知って驚いている。

剣聖上泉信綱は 60 歳代で亡くなっているが、その道統継承者の柳生石舟斎は 80 歳の長寿を保っている。

信綱の同時代人である塚原ト伝も 82 歳まで生きた。さらにト伝の一代前に生きた天真正香取神道流の創始者飯篠長威斎の寿命は 101 歳である。

思い付くままに述べる。信綱の高弟丸目蔵人佐は 90 歳まで、時代は下るが、江戸中期に土佐の剣術師範となった長谷川英信は 117 歳まで、法神流の榎本法神は 113 歳まで生きたことになっている。

どの分野でも長い時代の中で長寿者を出していることは間違いないが、剣術の分野は他を圧している。

その根本原因を分析することは容易ではないが、その重要な一端をなしているのは剣術独特の呼吸法であると小生は考えている。

禅宗の高僧が概して長寿であるのも呼吸法と無縁ではない。

剣術も座禅も複式呼吸がその基礎にある。丹田で呼吸することによって、内臓の秩序を整え、全身に活力を送り込むことが出来る。

全身の酵素を活性化することが出来るから、外部から侵入する病原菌を退治し、病気や衰弱の原因となる内部の病的要素を取り除くことが出来る。

丹田呼吸法とは、気を練ることであり、精神に安定性を与えることでもある。

では、具体的にどうすれば良いかを述べよう。私たちは普段は胸で呼吸している。それを腹で呼吸するように心掛ける。

下腹部には丹田というものがあり、全ての武道家の原点とも言うべき場所である。

丹田はへそから下三寸(9センチ)くらいのところにある。

丹田が十分に練れている人がその道の名人となる。

立っているときは脚を半開にして少し腰を落とし、口を閉ざして鼻から思いっきり息を吸い込む。そのとき可能な限り腹を膨らませる。

息を三秒間止めて、次に口と鼻から同時に吸った息の倍の長さでゆっくりと息を吐き出してゆく。そのとき腹の皮が背骨にくっつくのではないかとと思われるほど腹を引っ込ませる。そうして三秒間息を止め、鼻から息を吸い込む。その作業を一日 5,6 回もやれば目標達成である。

単なる腹式呼吸ではなく、同時に腹筋を鍛える呼吸法でもあるのだ。

私は 15 年ばかりその方法を実行してきた。お蔭で腹筋と下腹部は、意志によって柔軟に対応できる分厚いゴムのようなものになっている。

力を入れない状態でも分厚いゴム(腹筋)が守っていてくれるし、腹部に力を入れると、ゴムは鉄塊となって内臓を守ってくれる。

よくスポーツ選手がやるように、寝て身体を上下させる腹筋運動と全く同じ効果

を生む。むしろ一般の腹筋運動より優れているのは、下腹部分まで鍛えられて硬くなるということだ。へそ下三寸までカチカチになる。空手の有段者が思い切り突いてもびくともしない。

その効果をさらに高めるのが浴槽呼吸法だ。浴槽に浸かっていると水圧が腹部に加わって効果が倍増する。先に述べた呼吸法を5回も行えば、一日のノルマ達成だ。

できれば毎日やりたい。つまり毎日風呂に入って実行すればよい。

風呂に入らない時は、立ってでも座ってでも同じ呼吸法を行えば良い。

誤解はないと思うが、こうした呼吸法と剣術修行が一体となって先に述べた長寿が維持されることはいうまでもない。

新宿ピットイン公演

<< 作成日時 : 2008/05/28 22:05 >>

2008 年 5 月 9 日

ー昨年に続いてのピットイン出演である。ジャズドラマー中村達也さんの「マイセルフ ポートレイト イン ソロ」

公演の客演であることも同じ。

もう一人の客演は青森在住の津軽三味線奏者渋谷和生氏。

この公演では私は「年齢」というテーマが与えられており、どう構成するかに頭を悩ませる。

幼年期、青年期、老年期の三部に区切って即興朗唱することにした。とはいえ、あらかじめテーマが設定されるとどうしても具体的な言葉を考えてしまう。即興が売り物なのであるから、あらかじめ言葉を考えると暗誦になってしまう。それだけは避けたい。基本的な枠組みだけを考えて、出来るだけ具体的な言葉を考えないように心掛けた。

幼年期は、未来も過去もない本能のままに生きる最も幸福な期間、

青年期は過去は希薄であるが無限大の未来が開けた悩み多い時期として。無限大の未来に恐れおののき著しく感傷的になっており、未来への希望よりその恐怖に押し潰されて悲劇的な感情を抱いてしまう。

老年期は、意識の大半を過去が占め、将来は可視的な状況となっている。

だが、例え先は短くても生きているということによって未来は大きく開かれている。創造的人生を目指すか過去の遺産に胡坐をかいて生きるか、人生の明暗

がくつきりと分かれるところである。

この世に生を受けた瞬間から人は死ぬために生きる。

これが基本的認識である。もしかしたら生は膨大な浪費に過ぎないのかも知れない。このことは常に問い返して問い返して生きなければならない。

達也さんの創意に満ちた音の組み立てと、渋谷さんの流麗な津軽三味線に助けられて、思いどおりのエンディングに持ち込むことが出来た。

刀道講座「実戦刀法を語る」

<< 作成日時 : 2008/06/18 23:22 >>

2008年6月18日

神田に事務所を移した日本イベントプロデュース協会主催の講座「実戦刀法を語る」を行ってから、すでに一ヶ月が過ぎようとしている(5月23日実施)。怠慢のそしりは免れない。一応記録に残して置かなければと思い、ログインした。

この日は5月だというのに30度近くにまで気温が上がる夏日となった。真剣、居合刀、脇差、木刀の入った刀ケース、それに道着や資料の入った大きなバッグを肩から提げて神田駅に向かう。

地図を見ながら歩いたのだが、反対方向に歩いていたとみえて、10分ほど歩いてやっと間違いに気が付き、協会に電話する。すでに汗だくである。

一度神田駅に戻ってきて欲しいということだったので、元来た道を引き返し改札を出たところで待つ。瀬の高い青年が迎えに来てくれて会場のあるビルに向かう。

歩いて5分ばかりの所にビルはあった。一旦事務局に荷物を置いて食事に出掛ける。これから身体の動きを伴った講演を行わなければならないのだが、真夏日の中でのビールに手を出す誘惑を抑えることが出来ない。結局生ビールを注文した。

身体の隅々まで精気が蘇るのが分かる。助手に頼んでいた弟子の田村君も間もなくやってきて、道着に着替えて打ち合わせを終わったのが講演開始10分前。

20名を超える人たちが集ってきてくれた。資料は三種類用意してある。一枚目は刀剣の部位の解説図。二枚目は、刀にまつわることわざ集。三枚目は、現在最も名を知られている流派の系統図。この資料の順序に沿って話を進めてゆく。

刀剣の部位の解説は、次のことわざ集との関連が深いので、絶対に必要なものなのである。

たとえば、「しのぎを削る」という日常よく使われる慣用句があるが、しのぎ(鎬)というのは刀のどの部位に相当するか、また「元の鞘に納まる」とはどういうことかということを説明するのに図を参照する、といった具合である。

「ことわざ集」の解説が一通り終わったところで、流派の解説に移る。

現在小説映画等で最もよく知れている流派として、一刀流、新陰流、示現流、そして居合の二派(長谷川英信流、夢想神伝流)を選んだ。

それぞれの流派を代表する人物を解説しながら、代表的な術技を田村君相手に演じてみせる。

限られた狭い場所で鉄身でやるのだから、手元が狂えば助手に怪我をさせることになる。生ビールのお蔭で緊張感も程よく解け、ほぼ完璧に業を行うことが出来た。むしろ助手の田村君の方が緊張していたようにみえる。

野太刀自現流の「抜き」を演じて見せる場合(股間からへそに向かって真一文字に切り上げる)、そういう斬られ方をした人間がどういう倒れ方をするか、助手に課題として与えた。

斬られ方としては格好が悪いが、彼は尻餅をつく方法を選んだ。正解であると思う。

最も危険なのは、切り込んでくる相手の刀を左半身で受け流しざま脇の下を切り上げて後方に抜けてゆく業だ(一刀流仏捨刀)。それも無事クリア。

最後は居合で締めくくる。時計を見ていなかったのだが、決められた時間ぴったりに終わったということであった。依頼された講演は時間どおり終わるということが条件である。それもクリア。

終了後は、飲み会の席へ。

半数以上の方が席に来てくれる。またそこで好きな人たちとの剣術談義に花が咲く。

日本にやってきたばかりというフランス人が奥さん(日本人)と席に来られていて、私が主催する文武両道塾に入門したいと申し出てくれた。

奥さんの淀みない通訳で話がとんとん拍子に進む。文京区の小石川スポーツセンター剣道場で毎月二回行っている刀道の稽古に参加することになった。これは嬉しい。

刀道は、古流派の伝承ではなく、本来の剣術技すなわち実戦刀法の探求を行う流派である。したがって各古流の秘伝奥伝をどんどん取り入れて、実戦技に磨きかける。刀を扱うことに習熟すると次は日野の本部道場で試斬を行う手はずになっている。

興味のある方は、ぜひ、下記のケイタイに連絡下さい。





キムチに異変

<< 作成日時 : 2008/07/09 22:23 >>

2008年7月9日

私はたくあんや野沢菜などわが国の伝統的な漬物が好きなのだが、着色料やPH(ペーハー)調整剤などの添加物が必ず入っていることに気付き、添加物が一切入っていない韓国製キムチを好んで食べるようになった。

ところが、(他の食品についても言えることであるが)添加物が入っていない食品は値段が高いのである。

日本製キムチは韓国の本場物に比べて安い添加物が入っており、食べる気がしない。

再び、ところがである。もう数年前のことになるが、安い日本製キムチに押されて韓国製が売れなくなり、韓国のキムチ輸出製造業者が、添加物の混入を認めるように政府に訴えて認められたという新聞報道を読んだことがある。それ以来、添加物表示のある韓国製キムチを見かけるようになった。

もちろん、これまでどおり、添加物が一切入っていない本来の韓国キムチがなくなっただけではないが、さらに割高になってしまった。それでも私は高い漬物代になるのを承知で、添加物の入っていない韓国製を食べていたが、最近では、(高く売れなくなったためであろうが)添加物の入っていないキムチそのものをスーパーなどで見かけることがほとんどなくなってしまった。

替わりに、不自然な赤い色をした日本製キムチが店頭を占めている。試しに添加物がたくさん入った日本製キムチを買って食べてみたが、おかしい人工的な味がして甘く、本場物と比べると似て非なるものがあり、以後日本製はいつさい食べない。キムチは食べたいのであるが、本場物が余りにも高いので中々手が出せないでいる。

他の加工食品に添加物が入っていないものは見つけるのが難しい昨今なのである。

食品をやわらかくしたり、鮮やかな色を現出したり、持ちを良くしたりする添加物は、食品流通業界にとっては金の成る木であり、木の葉を小判に変える打出のコズチである。

私たち日本人は見た目にきれいなものを喜ぶ習慣があり、それが業者の付け目となっているわけだ。いわば、不自然な鮮やかな赤い色をしたキムチの登場は我々が望んだ結果でもあるのである。

キムチに気を付けろ！そして、人口化学物質であるテンカブツという得体の知れないブッシツの跳梁を許すな！と声を大にして叫びたい。

小劇団の奮闘

<< 作成日時 : 2008/07/13 23:40 >>

2008 年 7 月 13 日

先週の金曜日、池袋の「シアターグリーン」というコヤで行われた劇団「アクターズ MAP」の公演『妄想ラジオ ピンタ&ぽんた』という芝居を観てきた。

相変わらず、狭いステージに出演者がひしめく客集め見え見えの舞台であったが、彼らが訴えようとしていることが十分に感じられた公演でもあった。

お隣の韓国では何か問題があると若者たちが街頭に繰り出し、激しいデモを行う風景が TV で度々写し出されるが、飽食大国であるわが国では、滅多なことでは若者たちが抗議のデモをするということはない。まず皆無と言っていい。

だからといって、若者たちが沈黙しているわけではない。

彼らはこうして芝居という形で、世の中に抗議の声を上げているのだ。

もちろん、脚本を書き、演出をするのはさらに年配の世代であり、出演者たちが直接の声を上げている訳ではない。

しかしながら、制作者側を動かしているのは、ステージにひしめく出演者の若者たちであると私は思うようになってきている。

現代日本の若者たちはケイタイやパソコンを私物化してヘラヘラしているように見えるが、彼らの気持ちは屈折しており、ケイタイやパソコンが社会に対する鬱憤を晴らし抗議する手段でもある。ただそこは私的な空間へ止まる部分が多いのであり、外へ向かうエネルギーは相当部分閉ざされている。

しかし、演劇という表現手段は外へ向かって開かれるのであり、観客はメッセージをストレートに受け取ることが出来る。この演劇のテーマは、TV という巨大マスコミが持つ横暴なまでの権力を皮肉ったものである。

特にワイドショーと呼ばれる特別番組で取り上げられる話題が、それ自体がまるで権力の命令か覆すことの出来ない最終判決であるかのごとく、世論を、また俎上に載せられた当事者たちを、断罪し社会から抹殺してしまいかねない権力装置になっていることを暴くのである。

それを真正面からストレートに描くのではなく、人情をまぶしたドタバタ劇として観客の前に差し出す。笑いの中に真実あり、とでも言わんばかりに。

舞台の若手(ほとんど 20 代)出演者は自分たちの役回りを十分にわきまえた上でドタバタを演じているように見える。彼らはことの本質は何かということが分かっているのだ。

実際にところ、現代日本の最大の問題が、TV による世論操作だ。局側は自分たちが取り上げれば、それが国の問題であり、社会のテーマであると思い込んでいるフシがある。

彼らは、飢えた猛獣のように事件が起きるとよだれを垂らして飛びつきたちまち餌食にしてしまう。

どんなことでもよいのだ。話題となるテーマがあればすばやく喰らい付いてゆき、空腹を満たす。

抵抗する気配があると仲間を呼び集め骨までしゃぶり尽くしてしまう。

その日空腹を満たす何かがあれば何でも良いのだ。

無節操と呼ばれようが傲慢と非難されようが、一日の空腹を満たす何かがあればそれで十分なのである。もし何もなければ無理やりに問題を作り出してしまふ。架空の獲物でも腹を満たすことの出来る怪獣でもある。

このカラクリを暴こうとすれば、寄ってたかって潰されてしまうことは明白であるので、タレントたちはTVに逆らうことは出来ない。そうして、出演する人間ばかりでなく、観る人の心を奥深いところから蝕み崩壊させてゆく番組が日々垂れ流されることになる。

二週間ほど前に観た小劇場演劇でもほぼ同様のテーマを扱っていた。若者たちよ、芸術表現を通して(街頭でも出もよい)もっと暴れろ、もっと毒づけ！

君たちのような人たちがどんどん大きく輪を広げて行き、無差別に人を刺し殺すような同世代の若者の暴走に歯止めを掛けてくれ！

むろん、それをするのは私たちの責任でもある。若者たちに決して無関心であってはならない。若者たちの閉ざされた心を拡大し人間の暖かい感情を吹き込むことが出来るのは、私たち社会の経験を十分に積んだ大人たちに他ならない。

私はこれからも若者たちの動向に注目していきたい。そうして彼らと今を生きる感動を共有したい。

大沢在昌著『魔女の盟約』読後感想

<< 作成日時 : 2008/07/27 23:04 >>



2008 年 7 月 21 日

しばらく大沢の本を読んでいなかったが、図書館で見つけたので読んだ。

大沢の著書の特徴は、冒頭部分はトロトロとしていて説明場面が多く、中盤から終盤にかけて一気に展開し本を離せなくなる。

この本もその典型で、読み始めて数十頁あたりで放り出しかけたが、我慢して読んでいるうちにはまってしまった。

前作『魔女の笑窪』(2007 年刊)の続編である。この小説の主人公は女性で、九州にある地獄島と呼ばれる売春窟から大冒険の末逃げ出してきた(島抜けして)自分の過去と戦いつつ、本来の人間としての自分を取り戻そうとして奮闘する物語である。

とはいえ、純文学のように内面の葛藤を際限なく綴る類の小説ではない。

『新宿鮫』の著者の小説なのである。はっきり申せばヤクザの抗争がテーマなの

である。

それも日本のヤクザだけではない。日本のヤクザと韓国、中国のマフィアとの連携と抗争を真正面から取り上げている。

地獄島で何千人もの男を客とすることを余儀なくされた水原は、ただ生き延びることだけに集中する。島抜けした女は島の番人によって必ず見つけ出され、島へ連れ帰されて死ぬまで働かされる。水原は島抜けが成功したたった二例の内の一人なのである。

島は中国マフィアの進出によって組織が破壊され、一からの出直しを求められるが、その利用価値に眼を付けた大陸の暗黒組織の策謀と日本のヤクザ組織との連携が、その全てを知り尽くしている水原の抹殺に集中する。

水原は何度も暗殺の危機に直面しながらも、持ち前の度胸と軌跡ともいべき状況の急変によって助かるのである。

そこに小説の詐術と限界を察知せざるを得ないのであるが、彼女が生き延びることによるカタルシスを感じないわけにはいかない。

著者の大沢は、有り得ない状況を熟知しながら、小説的フィクションのリアリティに賭けている。小説の最後に、関係者が全員同じところに集り一派一からげの解決を図る安易さは著しくリアリティに欠けるが、これが大沢小説の手法であるから大目に見なくてはなるまい(アガサ・クリスティ?)。

ところで、中国マフィアの暗躍については馳西周などもよく取り上げているが、大沢のこの本では、朝鮮半島を故郷とする人たちが中国や日本に定住(あるいは帰化)して朝鮮族中国人、朝鮮族日本人という立場で、それぞれの暗黒組織が民族を中心にして大同団結を謀り、その勢力を飛躍的に増やしてゆこうとする様が、テ

ーマでもあるものとして描かれているところに面白さと特徴がある。

著者の意図から汲み取れるものは、これからも益々大陸のマフィアの進出は激しくなり、日本のヤクザ組織を圧迫して勢力争いを繰り広げるであろう、ということがある。

日本のヤクザは海外在住の日本人を組織して組の支部を作ろうとする気配は見えないが、大陸のヤクザは世界中にその触手を伸ばし、世界規模での暗黒組織を構築しようとしているように見える。

アメリカを支配しているシチリアマフィアが出来ないでいることを、アジアのマフィアがやろうとしている、という風に読み取れるのである。

民族紛争は世界各地で止まる気配はないが、世界各地での犯罪組織の紛争も止まる気配はない。益々規模が大きくなっているといっても過言ではない。

大陸と狭い海を挟んで向かい合っている日本の犯罪組織が、やがて 12 億の人口を擁する大陸系マフィアの傘下に吸収されることは目に見えている、というべきであろう。